

市民社会と社会主義

平田清

市民社会と社会主義

平 田 清 明 著

岩 波 書 店

市民社会と社会主義

昭和四十四年十月二十五日 第一刷発行
昭和四十五年五月十日 第五刷発行 ©

定価五百五十円

著 者 平 田 清 明
ひら た きよ あき

発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 株式会社 岩 波 書 店
東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号

三陽社印刷・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

序にかえて「夕鶴」とマルクス……………	一
——マルクス生誕一五〇年を記念して——	
一 市民社会の歴史のなかで……………	七
——ヨーロッパで考えたこと——	
Ⅰ 大地のうえのヨーロッパ……………	九
Ⅱ ヨーロッパの血と知性……………	二三
二 マルクスにおける市民社会の概念について……………	四九
はしがき……………	四九
Ⅰ 市民社会と資本家社会……………	五一
Ⅱ 市民社会の範疇的再構成……………	五四
1 方法概念としての市民社会(五一)	
2 交通様式と生産様式(五一)	
3 所有権法の転変(五八)	
Ⅲ 市民社会視座と唯物史観……………	六二

1 經濟的社会形成と社会の經濟的構造(六二)

2 近代的階級概念と個体的所有(六三)

三 市民社会と社会主義 七三

はじめに 七三

I 『資本論』研究の旋回 七六

——失われた基礎範疇は何か——

II 史的唯物論の再検討 九三

——失われた基礎視座は何か——

III 市民社会と社会主義 一〇〇

——社会主義とは何か——

四 市民社会と唯物史観 一二七

——範疇と日常語——

はしがき 一二七

I 私的所有と個体的所有 一二九

II 市民社会と唯物史観 一四八

A 市民的日常語の二義性——交換・取引・価値・労働——(一五二)

B 分業Ⅱ所有、生産Ⅱ交通諸関係(一六二) C 市民社会(一六九)

五 マルクスにおける経済と宗教……………一七七

まえがき……………一七七

I カール・マルクス問題……………一八二

II 初期マルクスにおけるユダヤ人問題……………一八七

III キリスト教批判としての市民社会論……………二〇三

1 疎外とは何か(二三)

2 貨幣物神と『黙示録』(二〇七)

3 抽象的人間とキリスト教(三六)

4 プロテスタンティズム

の思想と行動(二三)

5 結語にかえて(三四七)

六 キリスト教とマルクス主義……………二五七

I 現代と宗教……………二五七

II キリスト教とマルクス主義との接点……………二六五

III 黙示録の意義……………二七二

IV マルクス主義と宗教……………二八四

——結語にかえて——

七 市民社会と階級独裁……………二九三

はしがき	二九三
I チェコで提起された問題	二九四
II プロレタリアート独裁論におけるマルクスとレーニン	三〇一
1 マルクス 市民社会とプロレタリアート独裁(三〇四)	
2 レーニン プロレタリアート独裁論の展開と苦渋(三〇四)	
III レーニンと「レーニン主義」ロシア	三二七
——結語にかえて——	
1 官僚主義的代行国家の形成(三三〇)	
2 党独裁の完成(三三二)	
3 精神病理学的自己破壊の進行(三三三)	
4 社会的所有の歪曲	
(三四)	
5 国家社会主義としての「レーニン主義」ロシア(三三六)	
あとがき	三四一
索引	

序にかえて 「夕鶴」とマルクス

——マルクス生誕一五〇年を記念して——

「夕鶴」の名古屋公演をみた。一〇年ぶりに見た夕鶴は、明るい夕鶴であつた。舞台が全体としてそうであるだけでなく、最後の幕切れが、印象的に明るい。澄んでいる。まえに見たのとは、かなりちがった感じがする。木下順二氏の演出がそうさせているのか、与ひょうを演じた宇野重吉氏の解釈のためなのか、それとも私だけの思いすごしなのか、よくわからない。

いつどことも知れない昔の物語、日本の多くのところで語りつたえられたこの話。私もいつ聞いたのか忘れたが、聞かないうちから知っていそうな氣のするこの話を、木下氏は数日にして、一つの脚本にまとめたそうである。

こんどの舞台を見おわつてから、私はあらためて脚本を読みなおした。ちょうど貨幣論を勉強している最中なので、シェークスピアの『アテネのタイモン』と読みくらべてみた。明るいと私が感じたのは、夕鶴の近代性なのだと、私は知った。

鶴女房のつうがふたたび鶴となつて、遠く人間与ひょうの手から去っていくのは、ある過去の出来事そのものではないだろう。過去の一時点における、人間による自然喪失の事実そのものではな

いだろう。ヨーロッパ語に翻訳していえば、原罪にあたひすることではなからうか。与ひょうの自然(つう)喪失は、与ひょう自身の人間喪失である。それは人間が自然的な人間から市民的人間に転化して以降くりかえすほかない日常的な事象なのではなからうか。

残された与ひょうはどうなるのか。

むろん、残された布を、二枚とも売らないだろう。もはや一枚も、売る気にならないだろう。(現代っ子ならあっさり売られるかもしれない。)与ひょうは、布に残ったつうの肌身のあたたかみを抱きしめながら、生きていくだろう。と同時に、彼はすでに(ヨーロッパ流にいえば)罪の毒杯をあおいだのであり、商品経済のなかに生きていくだろう。商品経済は貨幣経済として展開するほかないし、貨幣が人間の心をむしろばんでいくだろう。しかし、貨幣が君臨しているにしても、生産はやはり生産である。人間的な営為だ。ひとは、人間と自然との合一をたえず再生産するのであり、つうをみずからの心のうちに、いや、みずからの肉体のうちに、つくりだすだろう。だが、つくられた物が商品として貨幣にひきとられていくとき、ひとは、みずからの内なるつうが去っていく悲しみを、あじわいつづけねばならない。夕鶴は過去のある暗い日の事件ではなく、私たちの日々の出来事である。

宇野重吉という人格をえたせいか、こんどの夕鶴では、与ひょうの比重が大きく、私たちの日常生活意識をゆさぶっている。

劇を見おわたした私の心に湧いたもう一つの感想は「負けた！」という快い敗北感であった。

つうには、惣どや運ずのことばが通じない。商品経済のことばは、まるっきり耳にはいらぬ。それにまぎこまれた与ひょうのことばだって、同じだ。

私は夕鶴を以前に二度ほど見ているのだから、この言語不通の場面を、私はたしかに、そのとき味わったはずである。だが私は、こんどあらためて見るまで、そのことのもつ意味の深刻さを知らないでいた。その場面そのものを忘れていた。おそらく私は、この言語断絶を、ただ二つの世界の断絶の象徴として見ていたにすぎなかったのでは、なからうか。夕鶴の世界を、自然の世界と物欲の世界の断絶として見るのは、皮相だろう。そう見ることは、経済学に翻訳すれば、使用価値の世界と価値の世界とを分断することと、同じである。

私がこんど舞台をみ、脚本をよんで驚いたのは、つうにはただおかねのことがわからないだけでなく、かねになることを予想して、これは「ほんものの千羽織かね」と聞く惣どのことばが、つうの耳にはいらぬことであつた。経済学に翻訳すれば、十兩とか五百兩とかいう価値の量が、また一般に価値それ自体が、つうにはまったく理解不可能なものであるだけでなく、価値のにない手としての使用価値そのものが、理解不可能なものともみなされていることである。そこには、使用価値としての使用価値が、価値のにない手に、商品の使用価値に、おとしめられたことに對する、切迫した批判意識が宿っている。夕鶴の詩と悲しみは、ロマンティックな幻想の姿において、自然的人

間の市民的人間への転化を、批判的にとらえたところにある、と私には思われる。

木下氏は芸術家であつて、もとより社会科学者ではない。専門の歴史家でもない。だが、木下氏の芸術家としての直観がいみじくもとらえた点こそ、西ヨーロッパの経済学の流れでは、ひとりカール・マルクスのとらえたものであつた。

マルクスがはじめて経済学を勉強したとき、彼はその『経済学ノート』に、つぎのように書きしるした。木下氏が自然的人間の側から描きだした事態を、マルクスは商業的人間の側から語らせるのである。

「われわれには人間のことばがわからない。それはまったく役に立たない。それは……懇願であり哀願であり、したがって恥じに値するもの、顔をしかめ浅ましいことだと思いつつ口にされることだ。……恥しらず、狂気の沙汰とみなされることだ。われわれは、たがいにすっかり人間の本質を疎外されているので、この人間の本質から直接に出てくることばは、人間の品位をけがすもののように思われる。これに反して、物の価値という疎外されたことばは、公認され、おのずから信頼され、おのずから認められる、人間的な品位のように思われる。」

夕鶴での惣どの目からみれば、貨幣を知るまえの与ひょうは、大バカだったし、女房といつしよにカゴメカゴメをして遊ぶのは、まったく子どもじみたたわごとだろう。木下氏がつうの側から商品語はわからないと書くのに対して、マルクスは、いわば惣どの側から人間語はわからないと、書

いているのである。

こう見てみると、芸術家木下氏と科学者マルクスとをならべてみるのも、場ちがいではないだろう。シェークスピアこそ貨幣の本質を知っている、と『アテネのタイモン』を評した人間マルクスの真骨頂を、明らかにすることにもなるだろう。

ことばの批判的省察は、言語をうむ社会過程の批判そのものである。

芝居を見おわたあとで、いつしゅに勉強している大学院の学生たちと語りあった。私はその討論のなかで『経済学ノート』のマルクスのことばのもつ意味を知った。夕鶴においてこのノートのことばを味読してこそ、マルクスの価値、貨幣論の人間学的意義を経験することができる、と私は感じられたのである。

西ヨーロッパ人であるマルクスの思想や理論は、なかなか日本のことばにうつすことができない。私は最近このことを胸が痛くなるほど感ずるのだが、夕鶴のなかにマルクスが生きていることを知って、マルクスの目の普遍的な豊かさを知ると同時に、日本人の知的能力の普遍性をも知る思いがするのである。

マルクス生誕一五〇年を記念するつもりで執ったペンが、夕鶴とマルクスという予想もしない文章を書いてしまった。私にはそれがごく自然であり、マルクスの生誕（一八一八年五月五日）を日本で記念するうえで見当はずれでもなさそうな気がしているのである。

〔付記〕 本稿発表後、私は、国際キリスト教大学での学生主催の講演会が機縁となって、同校の武田清子氏から、その最近稿『『信仰』の非宗教的把握の試み（岩波講座『哲学』第二卷所収）を、おくられた。木下氏のこの戯曲のなかにキリスト教での「罪」の問題とマルクス主義での「疎外」の問題とを見いだす点において、武田氏の見解が私の見解と期せずして一致しているのを、私は知った。それが、ほんらい期待しえざる一致だったのか、或いは、ほんらい期待しうる一致であったのか。いま、これに答えることができない。ここでいま確かに指摘しうることは、作家木下順二氏が、この国における異種の諸思想のあいだに、一つの精神的交通手段を確実に提供している、ということである。

一 市民社会の歴史のなかで

——ヨーロッパで考えたこと——

羽田を出発したオランダ航空のボーイング機が、最初に太平洋の島々を見るのは、沖縄上空においてであった。黄緑色の水に染まった環礁のようだ。それは海上の樂園のように見える。一万メートルの高度は、島のあらゆる現実を捨象して、私をまったく気軽な旅行者の気持ちにいざなう。この島々に住む人びとの苦難を新聞で知っている私は、新聞でしか知らされていない私である。日本列島をはなれて初めて目のなかに映る海上の景観に、いともたやすく見とれるのである。あまりうまくないカメラさばきでフィルムに写し終ったとき、これからのヨーロッパ旅行は、紙のうえでしか知らぬヨーロッパを上空から眺めるようなものかもしれない、という自戒めいたものが、胸をよぎる。

マニラ、バンコック、カラチ、クウェート。海と森と泥と河。それは、たしかに私の国の属するアジアであり、そして、中近東であった。そこは英語のつうずる国であり、また、英語しかつうじない国である。

アジア・中近東は、夜のうちに消えていく。深夜カイロ着。ナイルの河風が爽やかに頬をなで、

青銅のエジプト風彫像が、私に、異郷に立つた思いをさせる。異質なものの、なにかも異様なものである。アジアからの離脱感といえ、いささか無責任にひびくが、なにやら安堵感のような軽い気持ちに、私はさそいこまれる。べつとりと肌身についた宿命みたいなものから、暫くは、身を外においた思いがする。ショッピングセンターで、日本製トランジスタが麗々しく(?)並べられているのに気づく。売り子のエジプト娘は、さっそく商売を始めようとしたのだろうか、前に立っているのが日本人だと気づいたのか、"日本ではいくらで買えるのか"と尋ねたものである。"数年前の値段なら知っているが、今いくらするか知らない"と答える。彼女の言葉はフランス語である。たしかにここはアジアではない。

アテネまでの飛行機では、子供づれのイギリス婦人と一緒になる。小学校にはいったばかりらしいその子は、この夏休みにも、教科書を持って歩いているようだ。私にそれを見せてしきりに話しかける。アテネの叔父のところでは夏のヴァカンスを過ごすイギリス人親子であった。私のアイ・マस्कやスリッパなどの、あるいはレインコートや服などの化繊品が珍しいようだ。美しいキングス・イングリッシュで日本のテクスタイル・インダストリーについて尋ねる。私はといえば、この婦人の着ているミニドレスがウールであることのほうがイギリスを想わせるのだが、実は、ミニドレスそのものが気になるのである。

ともかく日本人の持っているもの、日本の作っているもの、それは、今では、ヨーロッパ人の人

目をひく程度には精密であり高級であるようだ。

アテネ。そこはヨーロッパ文明の発祥地と聞かされてきた。だが、近代的な国民生活に連続しない古代文化の遺跡は、なにかそろそろしい。観光資源だけにされていて虚しい。アクロポリスは、それを破壊したヴェネツィア艦隊の蛮行と結びつくことなく、ただ、ヘレニズム文化の終焉だけを印象づける。ヨーロッパ文化とは、事実そう簡単には連続しなかったのだろう。

西瓜だけが美味い。

ギリシアをヨーロッパ文化圏の外においてヨーロッパ史を考えてみようか、というのが、ヨーロッパなるギリシアにはいった最初の感想であった。

1 大地のうへのヨーロッパ

ローマには古代と近代がある。シーザーとイマニユエルとが鎮座している。むろんEEC時代の現代もある。

だが私の関心はやはり古代にひきつけられる。カタコンベにとじこめられた受難のキリスト教徒が壮大なサン・ピエトロ寺院に聖別されるまで、どれだけの苦悩の時間が流れたことか。異教徒のわたしにとって地獄の石穴でしかない空洞は、そこを訪ねる信者にとっては永遠の実体なのである。キリスト教史を知らない私はヨーロッパ史を知らぬ異邦人である。しかし、街で見るローマ帝国の

遺跡よりも殉難のそのほうが私の心の琴線にふれる。ローマの形成と帝国の崩壊までのこの地の生活と生命の歴史は、私の胸のなかでは何らの位置も占めていない。ローマ史は、私にとってたんに外的な事実であり思想であるにすぎなかった。

ところが、ヨーロッパ人にとっては、ローマ史は、ギリシア史とともに、彼らの精神における古典である。子供のときから教えこまれその肉体に同化したものである。古典学（ユマニテ）としてギリシア・ローマ史を骨肉化した人間こそ、彼らにとっての人類（ユマニテ）なのである。それが、愛の宗教としてのキリスト教の文化のなかにどのように生きたのか、私は知らない。つまり私はヨーロッパ形成の思想過程を知らない。というよりか、知ろうとする内的欲求がなかったのである。ローマの公園でゲーテの立像を見ていると、ヨーロッパ人は、古典学（ユマニテ）を人類の起源とみなすことによって、実在した古典古代を、直接に封建ヨーロッパに連続するものと、考えたがっているのではないか、という気がする。ルネサンスの時期から近代のシュトルム・ウント・ドランクの時代にいたるヨーロッパ知性が試みてきたことは、そのような錯覚の連続ではなからうか。眼前にある帰結のなかに消え失せて了った歴史過程の、諸連関のうちで最も遠いものを、敢えて近く結びつけただけのことではないのか。こんな、おそらくは邪推であるだろうようなことを考えながら、私は、そんなことを想像する私のヨーロッパ観のあやしさととまどったものである。たしかに私は、ヨーロッパというこの地上の一角を、地上の存在として、地上の生活の歴史として知ろうとしてこなかった